東京芸術劇場コンサートオペラ vol.9

Tokyo Metropolitan Theatre, Concert Opera vol.9

今なお、世界中で愛される、
オッフェンバックの傑作。

オッフェンバック／喜歌劇

美しきエレーヌ

演奏会形式／全3幕／
フランス語上演／
日本語字幕付

Offenbach:Operetta"La belle Hélène"

東京芸術劇場コンサートオペラ vol.9
Tokyo Metropolitan Theatre, Concert Opera vol.9

オッフェンバック／喜歌劇

美しきエレーヌ

演奏会形式／全3幕／
フランス語上演／
日本語字幕付／
ウィーン初演版

Offenbach:Operetta"La belle Hélène"
(Sung in French with Japanese subtitle)

2024年2月17日（土）
14:00開演
東京芸術劇場
コンサートホール

Sat.17.Feb 2024, 14:00
Tokyo Metropolitan Theatre Concert Hall

【第１幕】

Ouverture	序曲
Chœur	合唱
Chœur de jeunes filles	娘たちの合唱
Air- Amours divins! Ardentes flammes!	エレーヌのエール（アリア）
Couplets (Chanson d’Oreste)	クープレ（オレステスのシャンソン）
Mélodrame	メロドラマ
Le jugement de Pâris	パリスの審判
Mélodrame	メロドラマ
Marche et Couplets des rois	行進曲と王たちのクープレ
Mélodrame	メロドラマ
Final du 1er acte	第１幕のフィナーレ
Intermission(20’)	休憩 20 分

【第２幕】

Entracte	間奏曲
Chœur	合唱
Invocation à Vénus	ヴィーナスへの祈り
Marche de l’oie	すごろくの行進
Duo	エレーヌとパリスの二重唱
Final, Couplets et Chœur	フィナーレ（クープレと合唱）

【第３幕】

Chœur et Chanson d’Oreste	合唱とオレステスのシャンソン
Air	エレーヌのエール（アリア）
Chœur et Couplets de Pâris	合唱とパリスのクープレ
Final	フィナーレ

※未就学児の入場はお断りいたします。
※やむを得ぬ事情により出演者等が変更となる場合がありますので、あらかじめご了承ください。
※座席により一部字幕が見づらい場合がありますのでご了承ください。
※公演中の入退場、許可のない写真撮影、録音、録画は、固くお断りいたします。
※開演時刻に遅れますと、長時間入場をお待ちいただいたり、自席にご案内できない場合がございます。

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
劇場･音楽堂等活性化･ネットワーク強化事業(地域の中核劇場・音楽堂等活性化)｜
独立行政法人日本芸術文化振興会

NOMURA 野村財団　公益財団法人 ロームミュージック ファンデーション

Offenbach:Operetta"La belle Hélène"

Conductor: TSUJI Hiroyuki	指揮：辻博之
Text&Direction: SATO Miharu	台本・構成演出：佐藤美晴

出演

Hélène: SUNAKAWA Ryoko	エレーヌ：砂川涼子
Pâris: KUDO Kazuma	パリス：工藤和真
Ménélas: HAMAMATSU Takayuki	メネラオス：濱松孝行
Agamemnon: HARE Masahiko	アガメムノン：晴 雅彦
Oreste: FUJIKI Daichi	オレステス：藤木大地
Calchas: ITO Takayuki	カルカス：伊藤貴之
Achille: KISHINO Yuki	アキレ：岸野裕貴
Ajax premier: TANNAKA Yosuke	アイアスⅠ：反中洋介
Ajax deuxième: HORIKOSHI Toshinari	アイアスⅡ：堀越俊成
Narrator(spoken in Japanese): TSUCHIYA Shimba	語り（日本語）：土屋神葉
Chorus: The Opera Choir	合唱：ザ・オペラ・クワイア
Orchestra: The Opera Band	管弦楽：ザ・オペラ・バンド

●スタッフ

コレペティトゥア：江澤隆行
衣装コーディネート：佐藤美晴
ヘアメイク：高塚 yoshico
演出協力：中村康裕
字幕：佐藤美晴
字幕オペレーター：上野詩織（舞台字幕／映像 まくうち）

●東京芸術劇場　技術スタッフ

音響プラン：石丸耕一
照明プラン：新島啓介
舞台監督：奥野さおり

舞台：藤田満　鈴木久仁日呂
照明：早川美紀子　飯塚ゆかり　皆越萌／井上武憲　安藤達朗
音響：中野雅也　齋藤泰邦　田村悠記／行方太一　石﨑潔

辻 博之 【指揮】
Conductor/TSUJI Hiroyuki

©濱津和貴

東京藝術大学音楽学部声楽科在学中から、オペラ指揮者としての研鑽を積み、2017年オーケストラ・アンサンブル金沢定期公演にデビュー。その後も、九州交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団、読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団と共演を重ねる気鋭の指揮者である。
2021年には東京芸術劇場シアターオペラ『夕鶴』(團伊玖磨)を指揮し、『音楽現代』誌に「活躍を期待する指揮者」として取り上げられる等、オペラ指揮者としての頭角を表している。

佐藤美晴 【台本・構成演出】
Text & Direction/SATO Miharu

©Ayane Shindo

ウィーン大学演劇学科に留学し、慶應義塾大学大学院美学美術史学修了。ハンブルク歌劇場で演出助手、ドイツ、オーストリア、イギリスの歌劇場で研鑽を積む。近年の演出に、東京芸術劇場／金沢県立音楽堂共同主催『こうもり』、日生劇場／びわ湖ホール『魔笛』、北とぴあ国際音楽祭『ドン・ジョヴァンニ』『リナルド』、NHK音楽祭／NHK交響楽団『ドン・ジョヴァンニ』、日本フィル創立60周年『ラインの黄金』、ウィーンアルヒェ劇場『少年の不思議な角笛』等がある。第23回五島記念文化賞オペラ新人賞(演出)受賞。2019年まで東京藝術大学特任准教授、東京大学先端科学技術センター特任／客員研究員をつとめ、2020年9月よりウィーン在住。

土屋神葉 【語り】
Narrator/TSUCHIYA Shimba

1996年生まれ。アクション俳優の活動を通して“声の演技”に魅了される。2020年に第15回 『声優アワード』新人男優賞受賞。アニメでは『青のオーケストラ』佐伯直、『響け！ユーフォニアム』月永求、『BURN THE WITCH』バルゴ、『ハイキュー!!』五色工、『バクテン!!』双葉翔太郎、『ボールルームへようこそ』富士田多々良、吹き替えでは『ミュータント・タートルズ：ミュータントパニック！』ラファエロ、ゲームでは『ツイステッドワンダーランド』エペル、『モンスターハンターライズ;サンブレイク』オボロ、『アンジェリークルミナライズ』ユエなどを担当。朗読歌劇『ラ・ボエーム』や舞台『7本指のピアニスト』など、音楽をテーマとする作品にも縁がある。

砂川涼子 【エレーヌ／ソプラノ】
Hélène/SUNAKAWA Ryoko

©Yoshinobu Fukaya

武蔵野音楽大学卒業、同大学大学院修了。第10回(財)江副育英会オペラ奨学生として渡伊。第34回日伊声楽コンコルソ優勝。第69回日本音楽コンクール第1位。第16回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。2000年新国立劇場小劇場オペラ『オルフェオとエウリディーチェ』のエウリディーチェでデビュー以降、『カルメン』ミカエラ等に出演。その他、藤原歌劇団公演『ラ・トラヴィアータ』ヴィオレッタ、『ラ・ボエーム』ミミ、『ファウスト』マルグリート等主要な役で出演。日本オペラ協会には『源氏物語』『夕鶴』で出演。容姿・実力を兼ね備えた歌唱は常に高い評価を得ている。藤原歌劇団団員。日本オペラ協会会員。武蔵野音楽大学非常勤講師。

工藤和真 【パリス／テノール】
Pâris/KUDO Kazuma

©FUKAYA auraY2

岩手県出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院音楽研究科声楽専攻修了。第53回日伊声楽コンコルソ第1位及び歌曲賞(岡部多喜子・嶺貞子賞)、第17回東京音楽コンクール声楽部門第2位(最高位)及び聴衆賞、2023年には第2回ジュディッタ・パスタ記念熊本復興国際オペラコンクール第1位など受賞多数。東急ジルベスターコンサート2019-2020ではベートーヴェン『交響曲第九番』テノールソリストとして出演。
オペラではこれまでにNISSAY OPERA『トスカ』カヴァラドッシ、『カプレーティとモンテッキ』テバルド、藤沢市民オペラ『ナブッコ』イズマエーレ、新国立劇場『ボリス・ゴドゥノフ』グリゴリー、新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室 2023『ラ・ボエーム』ロドルフォなどで出演。2024年はパシフィックフィルハーモニア東京定期演奏会でヴェルディ『レクイエム』でソリストを務める。

濱松孝行 【メネラオス／テノール】
Ménélas/HAMAMATSU Takayuki

神奈川県鎌倉市出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程（独唱）修了。新国立劇場オペラ研修所20期修了。日本トスティ歌曲コンクール第1位及び日本歌曲賞他受賞。これまでにヴェルディ『椿姫』アルフレード役、チャイコフスキー『イオランタ』ヴォーデモン役、ベッリーニ『カプレーティとモンテッキ』テバルド役などを演じる。また、朝日新聞社主催第60回藝大メサイアをはじめ、モーツァルト『レクイエム』、ベートーヴェン《第九》、プッチーニ《グローリア・ミサ》等のソリストとして出演。ANAスカラシップにて、ミラノ・スカラ座アカデミア、バイエルン歌劇場オペラ研修所にて研修を受ける。

晴 雅彦 【アガメムノン／バリトン】
Agamemnon/HARE Masahiko

大阪音楽大学卒業。文化庁派遣芸術家在外研修員として独ベルリンに留学。独ケムニッツ市立劇場『魔笛』パパゲーノで欧州デビュー後、同劇場『ヘンゼルとグレーテル』『ウインザーの陽気な女房たち』、独ザクセン州立劇場『蝶々夫人』、独ラインスベルク音楽祭、瑞ヴァドステーナ音楽祭等に出演。国内では新国立劇場をはじめ全国の主要な劇場で活躍。チョン・ミョンフン、ペーター・シュナイダー等著名な指揮者や露レニングラード国立歌劇場管弦楽団等と共演。「プレミアム・シアター」「名曲リサイタル」「題名のない音楽会」等に出演。大阪府芸術劇場奨励新人、咲くやこの花賞、大阪文化祭賞奨励賞、兵庫県芸術奨励賞を受賞。大阪音楽大学教授。

藤木大地 【オレステス／カウンターテナー】
Oreste/FUJIKI Daichi

©hiromasa

2017年、オペラの殿堂・ウィーン国立歌劇場にライマン『メデア』ヘロルド役で鮮烈にデビュー。東洋人のカウンターテナーとして初めての快挙で、大きなニュースとなる。2012年、第31回国際ハンス・ガボア・ベルヴェデーレ声楽コンクールにてハンス・ガボア賞を受賞。同年、日本音楽コンクール第1位。2013年、ボローニャ歌劇場にてグルック『クレーリアの勝利』マンニオ役でヨーロッパデビュー。国内では、主要オーケストラとの公演や各地でのリサイタルがいずれも絶賛を博している。2023年は<全国共同制作オペラ>J.シュトラウスⅡ世『こうもり』オルロフスキー役をはじめ各地でオペラ公演や演奏会へ出演。デビューから現在まで絶えず話題の中心に存在する、日本が世界に誇る国際的なアーティストのひとり。洗足学園音楽大学客員教授。横浜みなとみらいホール初代プロデューサー(2021-2023)。

伊藤貴之【カルカス／バス】
Calchas/ITO Takayuki

名古屋芸術大学卒業、同大学大学院修了。奨学金を得てミラノで研鑽する。第48回日伊声楽コンコルソ第2位、第41回イタリア声楽コンコルソ金賞受賞。愛知県芸術劇場の『椿姫』でグランヴィル医師役でデビュー以降数々の作品に出演する。近年は藤原歌劇団『ファウスト』メフィストフェレス、新国立劇場『アイーダ』国王、日生劇場『マクベス』バンクォーなどに出演している。その他にアルベルト・ゼッダ指揮『スターバト・マーテル』ではバスソロで出演しNHK-BSで放送された他、「題名のない音楽会」やNHK-FM「リサイタル・ノヴァ」に出演するなど注目を集めている。平成24年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞。藤原歌劇団団員。

岸野裕貴 【アキレ／テノール】
Achille/KISHINO Yuki

東京音楽大学声楽演奏家コース卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程オペラ専攻修了。モーツァルト《レクイエム》、ベートーヴェン《第九》、バッハ《ヨハネ受難曲》、《カンタータ》等テノールソロの他、オペラでは藝大オペラ《コジ・ファン・トゥッテ》フェランドでの出演以降、小澤征爾音楽塾《ラ・ボエーム》ではパルピニョール役で出演。他に《ドン・ジョヴァンニ》ドン・オッターヴィオ、《愛の妙薬》ネモリーノ、《ドン・パスクワーレ》エルネスト、《アルジェのイタリア女》リンドーロ、《ファルスタッフ》フェントン役等を演じる。 東京音楽大学非常勤声楽研究員。

反中洋介 【アイアスI／テノール】
Ajax premier/TANNAKA Yosuke

岐阜県高山市出身。武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科首席卒業。同大学院音楽研究科修士課程ヴィルトゥオーゾコース声楽専攻修了。同大学卒業演奏会出演。第42回読売中部新人演奏会出演。第12回東京国際声楽コンクール新進声楽家部門本選入選。第12回岐阜国際音楽祭コンクール声楽部門専門 一般Ⅰ審査員特別賞受賞。
2019年、武蔵野音楽大学オペラコース公演『コジ・ファン・トゥッテ』フェルランド役。2023年、東京芸術劇場、愛知県芸術劇場『道化師』ペッペ役のカヴァーキャストを務める。サラダ音楽祭2023こどものためのオペラ『アトランティス･コード』サトシ役で出演。

堀越俊成 【アイアスII／テノール】
Ajax deuxième/HORIKOSHI Toshinari

福島県会津若松市出身。東京藝術大学卒業。同大学大学院独唱科修了。市川市文化振興財団主催第32回新人演奏家コンクールにて優秀賞を受賞。第4回かわさき新人声楽コンクールにて聴衆賞を受賞。これまでに声楽を佐藤淳一、豊嶋祐壹、吉田浩之の各氏に師事。オペラでは『愛の妙薬』ネモリーノ、『椿姫』アルフレード、『シモン・ボッカネグラ』ガブリエーレ、『ラ・ボエーム』ロドルフォ、『トスカ』カヴァラドッシ、『カルメン』ドン・ホセ等、リリコの主要な役を中心に活躍。また、『出雲阿国』名古屋山三郎、『箱』九 等の新作日本語オペラにも出演し、いずれも好評を博す。その他、ベートーヴェン《第九》等のテノールソリストも務める。藤原歌劇団団員。

ザ・オペラ・クワイア【合唱】

Chorus/The Opera Choir

喜歌劇『美しきエレーヌ』公演のために、都内近郊で活動する音楽家を中心として特別に結成された合唱団。ソロや合唱で活躍する実力者が集結し、ここでしか聴くことのできない歌声をお届けします。

【ソプラノ1】	【ソプラノ2】	【テノール】	【バス】	【インスペクター】
今井実希	片岡美里	岸野裕貴	岩田健志	岸本大
大網かおり	櫻井日菜子	鹿野浩史	大島嘉仁	
木田悠子	杉山由紀	鈴木俊介	大槻聡之介	
佐々木麻子	鈴木望	鷹野景輔	齊藤一頼	
梁瀬彩加	持田温子	山中志月	倍田大生	

1分でわかる『美しきエレーヌ』のあらすじ

舞台は神話時代、ギリシャのスパルタ。「この世で最も美しい乙女」と名高いエレーヌは、夫であるスパルタの王メネラオスとの平凡な夫婦生活にうんざりしている。「どうか愛をお与えください」と切望するエレーヌ。そんな彼女の前に、羊飼いに扮したトロイアの王子パリスが現れ、エレーヌは彼に一目惚れする。パリスの本当の身分が明かされると、エレーヌは仰天。実はこの二人、出会うべくして出会った二人であったのだ。そうこうしているうちに、パリスと結託している予言者カルカスの手によって、メネラオスは訳も分からないままクレタ島行きを命じられてしまう。

夫不在の部屋のなかで、未来を案じるエレーヌ。そこに、「そろそろ僕と一緒にならないか」とパリスがやって来る。最初はためらいをみせていたエレーヌであったが、夫との生活に飽きていた彼女は、まんざらでもないご様子。「これは夢の中だから」と言って、ついにパリスとの甘い時間を過ごすことに。しかし、そこにクレタ島に行っていたはずの夫が突然帰ってきてしまう……。妻の浮気現場を目の当たりにして唖然とするメネラオス。騒ぎを聞きつけ集まる人々。追い出されるパリス……。さあ、どうする、エレーヌ！

ザ・オペラ・バンド【管弦楽】

Orchestra/The Opera Band

2005年、佐藤正浩(指揮)と今野京(コントラバス奏者)により設立された。Orchestre "Les Champs-Lyrics"の名称で活動してきたが、2015年、10周年を機に“ザ・オペラ・バンド”に改称。オーケストラ・ピットに入り演奏することを目的とし、N響をはじめとする首都圏のプロオーケストラ演奏家を中心に編成される。これまでに、コジ・ファン・トゥッテ、蝶々夫人、ナブッコ、オテッロ、仮面舞踏会、マクベス、白虎(加藤昌則)等を演奏した。
東京芸術劇場のオペラシリーズでは、2014年『ドン・カルロス』(仏語版日本初演)、2016年『サムソンとデリラ』、2018年『真珠とり』、2019年『ジャミレ』他、2020年『フィガロの結婚』、2021年『夕鶴』、2023年『こうもり』に出演し、精緻なアンサンブルと華麗なドラマを聴かせると好評を得ている。『ナブッコ』、『マリア・ストゥアルダ』で三菱ＵＦＪ信託音楽賞を、オペラ『白虎』で佐川吉男賞を受賞した。2022年、Tobu Recordingsより《ビゼー：劇音楽「アルルの女」全曲（A.ドーデ原作による原典版）》を発売。

【第1ヴァイオリン】永峰高志★　森岡聡　髙井敏弘　門岡亞純
山本大心　松本志絃音
【第2ヴァイオリン】吉村知子　船木陽子　石突美奈　藤岡瑞季　林桃子
【ヴィオラ】中村洋乃理　小野聡　大矢章子　田中千穂
【チェロ】村井 将　藤村俊介　人見 遼
【コントラバス】今野 京　長谷川順子
【フルート】梶川真歩　岡本有紀
【オーボエ】青山聖樹　中山亜津紗
【クラリネット】伊藤 圭　和川聖也
【ファゴット】宇賀神広宣　菅原恵子
【ホルン】久永重明　向井正明　桑原 舞　種子田佳歩
【トランペット】伊藤 駿　内藤知裕
【トロンボーン】古賀 光　奥村尚美　藤井良太
【ティンパニ】久保昌一
【打楽器】尾形賢一　平松寛大　佐野響兵

【インスペクター】今野 京
【ステージマネージャー】近藤直人
【ライブラリアン】山口 彩　★コンサートマスター

エレーヌ祭りを前に

文：佐藤美晴（台本・構成演出）
Text by SATO Miharu (Text & Direction)

ついに、ついに！『美しきエレーヌ』が、日本ではじめてオーケストラ付き原語コンサート上演されることになりました。まずはここに至るまでの日本での受容史、これがなかなか山あり谷ありの旅でした。『美しきエレーヌ（以下『エレーヌ』）』は1864年にパリで初演されて大当たりし、その翌年のウィーン初演を皮切りに急速に広まっていくのですが、実はそのウィーン初演から20年経たずに明治時代の日本でも上演されていたのです。当時、横浜の外国人居留地には倉庫を改築して作られた日本初の西洋風劇場がありました。その劇場は場所を移して350席を備えた本格的な劇場ゲーテ座となりますが、その新築ホヤホヤのおめでたい1885年（明治18年）、新旧両方のゲーテ座で『エレーヌ』の上演が7回も行われていました。出演者はフランスからやってきたモーレル一座からの二人の女性歌手にピアニスト、そして横浜在住のアマチュア外国人たち。観客は主に現地の居留外国人。文明開化の日本で祖国フランス語のオペレッタを観たなんて、または彼ら自身も出演していたなんて、在留フランス人の皆さんにとって、どんなに心躍る上演だったことかと思います。

『エレーヌ』のストーリーは楽しくわかりやすい一方で、エレーヌの心の機微、女性の視点が細やかに深く描かれています。彼女はパリスに恋してからは死に向かう定めという意味を持つ「fatalité（ファタリテ／運命、宿命）」という言葉を何度も使います。美しい彼女が官能（エロス）の犠牲になっていく姿が、オッフェンバック流のユーモアとロマンで包まれ、その繊細なエロティシズムは夢の出来事のようです。ギリシア神話になじみがない現代の私たちにも刺さるポイントが沢山あります。

パリやウィーンでの初演以来、『エレーヌ』のヴィーナスの愛の炎は、形を変えて日本に伝わってきました。今年で初演から160年。今回は声優の土屋神葉さんをお迎えし、語りによるオリジナルスタイルのコンサート上演です。今回のエレーヌ祭りが大きな炎となって燃え上がり、天のヴィーナスを驚かせられるといいのですが、さて、どうなることでしょうか。

曲目解説　木内涼（音楽学／東京藝術大学）
Programme notes

【あらすじ】

第1幕　ギリシャのスパルタ、ジュピテル神殿前の広場

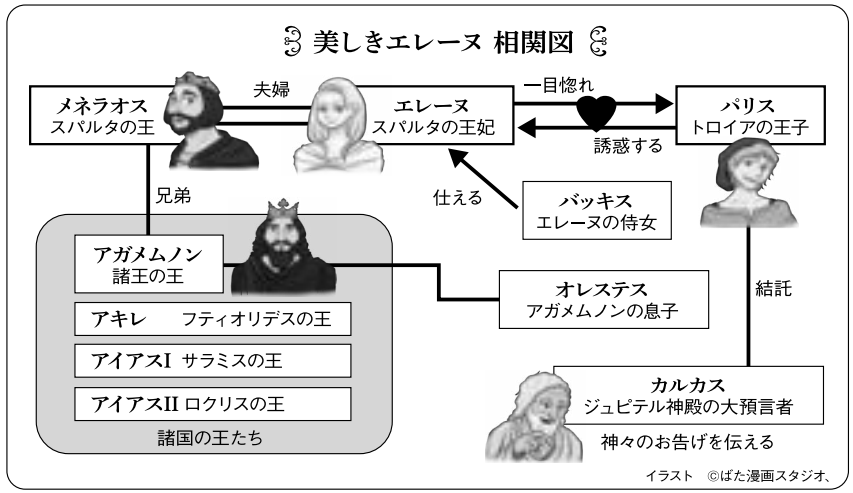
人々は神殿の前に跪（ひざまず）き、熱心に祈りを捧げている。今日はウェヌス（ヴィーナス）の恋人アドニスの死を悼む儀式の日である。一方、「この世で最も美しい女性」と名高いエレーヌは、夫であるスパルタの王メネラオスとの平凡な夫婦生活を送っている。「どうか愛をお与えください」と彼女はウェヌス（ヴィーナス）に切望する。預言者カルカスが、遊女たちを引き連れてやってきたオレステスを追い返し、神殿に戻ろうとした時、そこに羊飼いに扮したパリスが現れる。すると、一羽の鳩がウェヌス（ヴィーナス）の手紙を運んでくる。そこにはこう書かれていた―「パリスにエレーヌを与えよ」。これがウェヌス（ヴィーナス）の計画だ。エレーヌもその羊飼いに一目惚れである。続いて、2人のアイアス、アキレ、メネラオス、アガメムノンらギリシャの王たちがやってきて、言葉遊び大会を開催する。勝負に勝ったのは羊飼いのパリス。ついに、彼が本当の姿を明らかにすると、カルカスはウェヌス（ヴィーナス）の計画を進めるため、メネラオスに1ヵ月間のクレタ島行きを命じる。

第2幕　王妃エレーヌの部屋

エレーヌは侍女たちに囲まれて、夜会に参加するための身支度をしている。自分の運命に悩む彼女は、その想いをウェヌス（ヴィーナス）に訴える。「そろそろ僕と一緒にならないか」とパリスはそこにやってくるが、エレーヌは彼を冷たくあしらってしまう。王たちのすごろく遊びの後、部屋に戻ったエレーヌは、カルカスに「夢でパリスに会わせてほしい」と頼む。彼女が眠りにつくと、奴隷に扮したパリスが現れる。「これは夢のなかだから」と二人は甘い時間を過ごすことに。しかし、そこにクレタ島に行っていたはずの夫が突然帰ってきてしまう。妻の浮気現場を目の当たりにして唖然とするメネラオス。しかし、「賢い夫というものは、帰るときには事前に連絡するものよ」とエレーヌは一蹴する。王たちに糾弾されたパリスは、「また戻って来るぞ」と言い残し、スパルタを後にする。

第3幕　ナウプリアの海岸

計画がうまくいかなかったウェヌス（ヴィーナス）は、その腹いせとして、すべての夫婦を別れさせてしまった。今やこの世は酒池肉林の大騒ぎである。釈明を求める夫にも、エレーヌは「夢のなかでのことだから」の一点張り。そこに、ウェヌスの預言者に扮したパリスが現れ、「エレーヌがシテール島へ巡礼するならば、ウェヌスの怒りも鎮まるだろう」と告げる。エレーヌは躊躇しながらも、彼に連れられてシテール島に向かうことに。しかし、その預言者が、エレーヌを連れ去りにやってきたパリスであったことが明かされる。二人は人々に見送られながら、大喜びで出発するのであった。



【作品解説】

『美しきエレーヌ』は、ドイツに生まれフランスに帰化した作曲家ジャック・オッフェンバック（1819～1880）による3幕のオペレッタ（オペラ・ブーフ）である。台本はアンリ・メイヤックとリュドヴィック・アレヴィによるもので、1864年12月17日にパリのヴァリエテ座で初演された。

オッフェンバックは、パリ万国博覧会が開催されていた1855年の夏、シャンゼリゼに小劇場を借り、そこでブーフ＝パリジャン座を立ち上げた。当時のパリでは、劇場のヒエラルキーが明確に存在しており、各劇場で上演可能なレパートリーにも厳しい制約があった。オッフェンバックの劇場も例外ではなく、登場人物の数など多くの制限があるなかで創作をしなければならない時期が続いた。その突破口となったのは、1858年に初演された『地獄のオルフェ（天国と地獄）』である。古典神話を下敷きに、フランスの第二帝政という時代が抱えるリアリスティックな問題を見事にパロディ化したこの作品は、劇中で踊られる〈地獄のギャロップ（フレンチ・カンカン）〉とともに、彼の代名詞として知られている。これをきっかけに、合唱を含む大規模な舞台作品を上演することが可能になり、オッフェンバックはいよいよ、その活動に弾みをつけていった。

そして彼自身、「『地獄のオルフェ』の対になるような作品」として構想していたのが、『美しきエレーヌ』である。この作品は、トロイア戦争の発端となったギリシャ神話「パリスの審判」を基に、パロディ劇として仕上げられたものである。その創作過程には、多くの困難が立ちはだかっていた。この時、すでにブーフ＝パリジャン座の経営から身を引いていたオッフェンバックは、ヴァリエテ座の支配人イッポリト・コニャールの意向に従わなければならなかった。また、エレーヌ役のオルタンス・シュネーデルとオレステス役のレア・シリーとの間に確執が生まれていたことも、オッフェンバックの頭を悩ませることとなった。そのうえ、検閲の介入によって、宗教的な理由から預言者カルカスの役回りが問題視され、台本にちりばめられていたいくつかの風刺的な要素も取り除かなければならなくなってしまったのである。

こうして数々の問題を乗り越えて迎えた『美しきエレーヌ』の初演は、シュネーデルをはじめとする初演者たちの功績もあって大成功を収めた。『地獄のオルフェ』のときと同様、「古典神話に対する冒涜」とみなした批評家がいた一方で、初演後の約半年間にヴァリエテ座では150回近く上演され、周辺各都市の劇場でも相次いで取り上げられるなど、その人気は確かなものとなっていった。

『美しきエレーヌ』の初演はまた、オッフェンバックにとって、台本作家のメイヤックとアレヴィとの共同制作の本格的なスタートでもあった。以後、この三人は、『青ひげ』や『パリの生活』（以上、1866年初演）、そして、日本でも大正時代の浅草オペラの頃から『ブン大将』の題で親しまれてきた『ジェロルスタン女大公殿下』（1867年初演）などの作品を次々と成功させてゆく。本作品はまさに、オッフェンバックの最も脂の乗り切った時期の作品のひとつということができるだろう。

【聴きどころ】

パリ初演からわずか3ヵ月後の1865年3月17日、ウィーンのアン・デア・ウィーン劇場に於いて『美しきエレーヌ』のドイツ語初演が行なわれた。オッフェンバックは、このウィーン公演のためにいくつかのナンバーを新たに作曲している。本日の公演では、ジャン＝クリストフ・ケックによる批判校訂版のうち、ウィーン公演版が使用されている。

𝄞 序曲

パリ初演版では短い導入曲が置かれているが、今回演奏されるのは、ウィーンのために新たに用意された序曲である。〈王たちのクープレ〉と第2幕フィナーレのワルツの主題が用いられており、推移的な部分を経て、そのまま第1幕へと繋がる。

𝄞 第1幕　ギリシャのスパルタ、ジュピテル神殿前の広場

合唱：トライアングルの音で彩られた軽やかな音楽で幕を開ける。神殿の前に跪き、供物を納める人々の合唱。

娘たちの合唱：アドニスの死を悼む哀歌。美しい女声合唱に始まり、途中からエレーヌも加わる。

エレーヌのエール（アリア）：前の合唱に続いて歌われるエレーヌの歌。彼女は〈愛のない世界にこそ、愛が必要です〉とウェヌスに熱烈な祈りを捧げる。叙情的な旋律が魅力の一曲である。

オレステスのシャンソン：エレーヌの甥のオレステスが遊女たちを引き連れて登場する。彼は国家のお金で遊んでしまうような放蕩者。オノマトペを使用した陽気な音楽には、彼の性格がうまく描写されている。

パリスの審判：羊飼いに扮して登場したパリスが、イダ山頂で行なわれた美女コンテストの顛末を歌う。その素朴な旋律は、パリスに結び付けられたモティーフとして、劇中に何度か登場する。

行進曲と王たちのクープレ：勇壮な合唱〈さあギリシャの王たち！〉に続いて、ギリシャの

王たちの自己紹介のクープレとなる。音節の一部を繰り返すことで、生き生きとしたリズムが生み出されている。

第1幕フィナーレ：羊飼いがパリスであると知ったエレーヌは、その驚きをドラマティックに歌い上げる〈リンゴのお方〉。この場面はシリアスなオペラの音楽的なパロディとなっていることにも注目したい。まもなく雷鳴が轟き、神のお告げが下ると、〈王たちのクープレ〉の旋律による合唱〈クレタ島へ早く旅立ちを！〉となり、一同はメネラオスを追い出す。

第2幕　王妃エレーヌの部屋

間奏曲：〈ウェヌスへの祈り〉の主題に基づく短い間奏曲。ウィーン公演用。

合唱：エレーヌとその侍女たちによる優美な合唱。侍女たちは、夜会に出席するエレーヌに〈今日という日には特別なお召し物を〉と勧める。

ウェヌスへの祈り：妻の貞操を守るべきか、それともパリスの愛を受け入れるべきか、エレーヌの気持ちは揺れ動いている。彼女は〈私の美徳を滝のように落として、そんなに楽しいの？〉とウェヌスに訴える。

すごろくの行進：すごろく遊びに興じるために王たちがやってくる〈王の中の王のお出ましだ〉。フランス語の「すごろく遊び jeu de l'oie」の「oie（ワ）」にはガチョウの意味もあり、この語を繰り返すことで滑稽さが引き出されている。

エレーヌとパリスの二重唱：寝室に忍び込んだパリスとエレーヌの愛の二重唱。〈そうよ、これは夢〉、〈ただの愛の甘い夢〉と美しく官能的な音楽が続く。

第2幕フィナーレ：メネラオスが「名誉を汚された！」と周囲に訴え、人々が集まって来る。この感情の高まりがやや誇張された形で歌われた後、エレーヌは教訓的な歌で夫を非難する〈旅から帰る賢い夫の心得は〉。王たちは、美しいワルツの旋律にのせてパリスを糾弾する。

第3幕　ナウプリアの海岸

合唱とオレステスのシャンソン：リズミカルな合唱〈踊ろう！愛し合おう！飲もう！歌おう！〉に続き、パリスのスパルタ追放を喜ぶオレステスの陽気なシャンソンとなり、これに皆が唱和する。

エレーヌのエール（アリア）：パリスとの一件について、執拗に問いただそうとする夫に辟易したエレーヌは、〈あれは夢だった〉のだから〈私は悪くないわ〉と歌う。ウィーン公演のためのナンバーである。

合唱とパリスのクープレ：ウェヌスの預言者に扮したパリスの乗ったガレー船の到着を告げる合唱。パリスのクープレでは、厳かな前半に続いて、それと対比されるようなチロル風の〈僕は陽気、みんなも陽気に〉に合唱が応える。

第3幕フィナーレ：パリスは自分の正体をエレーヌにこっそり告げる（ここで、〈パリスの審判〉の旋律が登場する）。事情を察したエレーヌは〈これも運命なのね〉と喜んでパリスについてゆく。最後は、再び〈王たちのクープレ〉の旋律による二人の船出を見送る合唱〈シテール島に行け〉で幕となる。

【コラム】

『美しきエレーヌ』と ギリシャ神話「パリスの審判」

『美しきエレーヌ』は、古代ギリシャの詩人ホメロスの『イーリアス』で有名なトロイア戦争の発端となった、「パリスの審判」のエピソードが基になっている。ここでは、その内容を簡単にご紹介しよう。

――神々の結婚式に招かれなかったことに激怒した女神エリスは、その宴席に黄金のリンゴを投げ入れる。「最も美しい女神へ」贈られたこのリンゴを巡って、ヘラ（ジュノー）、アテナ（ミネルヴァ）、アフロディテ（ヴィーナス）の三美神が争いを起こす。そこで白羽の矢が立ったのが、トロイアの王子パリス。彼は三美神のうち誰が一番美しいかを決めることになったのである。三美神はそれぞれ、支配の力（ヘラ）、勝利の力（アテナ）、最も美しい女性（アフロディテ）を見返りとしてパリスに与えると約束する。パリスが選んだのはアフロディテ、愛と美の女神ヴィーナスであった（ここまでの話は、第1幕の〈パリスの審判〉で語られる。また、第1幕フィナーレでパリスの真の姿が明らかになったとき、エレーヌが「リンゴのお方」と叫ぶのは、エリスが投げ入れた黄金のリンゴの話を踏まえている）。

そうして「最も美しい女性」を手に入れるためにパリスはスパルタに向かう。しかし、その女性はスパルタの王メネラオスの妃ヘレネ（エレーヌ）、つまり、人妻だったのだ。パリスはヘレネを誘惑し、ついに彼女をトロイアへと連れ帰ってしまうのであった――

と、ここまでが今回の『美しきエレーヌ』のなかでも描かれるお話。その後、ヘレネを誘拐されたことに憤慨したメネラオスは、ギリシャの王たちとともに、ヘレネ奪還のためにトロイアへと向かう。かの有名な「トロイア戦争」はこうして始まるのである。

木内　涼（東京藝術大学／音楽学）